

## 若きエラスムスとヒエロニムス ——『反蛮族論』における引用をめぐる——

柳沼 正広

### はじめに

An me latet Augustinum Hieronymumque, viros tum literarum eruditione praestantes, tum vitae sanctimonia celebres diuersis inter se disside, imo decertasse sententiis ?<sup>1</sup> 「私は文学の学識において優れ、神聖な生き方においても名高い人物であるアウグスティヌスとヒエロニムスを忘れていたのだろうか？彼らは異なった意見によって一致しないこともあったし、また実際に争いもした」。これはエラスムス (c.1466-1536) が1489年頃、修道院で『反蛮族論』*Antibarbarorum liber* を書き始めた頃と同時期に書いた友人宛の書簡において、必ずしも友情は意見の対立を排除しないことを論じる中で述べたもので、エラスムスが若いころからこの二人の教父を豊かな学識と敬虔をあわせもつ理想的人物と考えていたことの証左とされるものである<sup>2</sup>。エラスムスは教父への関心を深めてゆき、それは1516年にはヒエロニムスの著作集の発刊、1529年にはアウグスティヌスの著作集の発刊という具体的な形で結実する。

本稿ではエラスムスの最初期の著作であり、彼がその中で異教の古典研究の擁護を力強く行なった『反蛮族論』においてヒエロニムスがどのように引用されているかを見ていきたい。第一節では『反蛮族論』の主旨とそれを支えるために引用されているヒエロニムスの書簡を、第二節ではエラスムスの修道院時代の友人コルネリス・ヘラルトとの交流の中でのヒエロニムスを、第三節では『反蛮族論』でのグラティアヌスを通してのヒエロニムスの引用を見ていく。そして第四節においてヒエロニムスの引用のあり方について *dissimulatio* という視点から考察を加えたい<sup>3</sup>。

---

<sup>1</sup> Erasmus, *Opus Epistolarum Des. Erasmi Roterodami*, ed. P. S. Allen, H. M. Allen and H. W. Garrod (Oxford: Clarendon Press, 1906-1956; reissued 1992) vol. 1, p. 99, ll. 89-91. 以下AllenI, p. 99, ll. 89-91 のように略記する。

<sup>2</sup> Den Boeft, Jan, 'Erasmus and the Church Fathers,' in *The Reception of the Church Fathers in the West: From the Carolingians to the Maurists*, ed., Irena Backus (E. J. Brill 1997) vol. 2, p. 537.

<sup>3</sup> なお本稿第一節と第三節は拙稿「エラスムスの古典研究擁護におけるヒエロニムスとアウグスティヌスの引用について ——『反蛮族論』*Antibarbarorum liber* から——」『創価大学人文論集』第16号 (2004年3月)の一部を大幅に加筆・改変したものである。

## 1. 『反蛮族論』におけるヒエロニムスのマグヌス宛書簡

エラスムスは『反蛮族論』を1520年に出版した際に付した序文<sup>4</sup>で、この作品にとりかかったときまだ自身は20歳に達していなかったと述べている。その内容は、ギリシア・ローマの学問を異教のものとして否定する人たちに対する古典研究の擁護である。また序文でエラスムスは演説形式から対話形式へなおしたうえ、何度か加筆・書き直しを行ったとも述べている。対話編に書きかえたばかりと思われるものの写本も伝えられており、その書きかえは1495年の春ごろと考えられている<sup>5</sup>。本稿ではその1495年のテキストに焦点をあてる。

『反蛮族論』では、まず古典研究が衰退してしまったのはなぜかとの問いが投げかけられ、その主な原因は、教育者たちの愚かさにあるとされる。つまり「蛮族」とは、異教の文学を知らないために非難する無知な教育者を指している。この蛮族に対する攻撃として話はすすめられていくが、論点は二つに要約できる。一つは学問と信仰の純粋さは両立しうるのか、もう一つは異教の文化はキリスト教と調和しないのではないかである。これらに対して、エラスムスは、信仰の純粋さを無知と結び付けることは間違いであり、知識そのものに問題があるのではなく、用い方次第であると説き、異教の文化はすでにキリスト教徒の生活に密接なものであり、その中には有用なものもあり、さらにはそれらはキリスト自身がキリスト教の信仰のために用意したものであると主張する。この最後の点について述べられている個所を見ておこう。

Iam vero in legibus, in philosophia, quantus sudor antiquis fuit ? Quorsum tandem haec omnia ? num, vt nos exorti contemneremus ? an potius, vt optima religio pulcherrimis studiis tum honestaretur, tum fulciretur ? Omnia ethnicorum fortiter facta, scite dicta, ingeniose cogitata, industrie tradita, suae Rei p. praeprauerat Christus. Ille ministrauerat ingenium, ille quaerendi ardorem adiecerat, nec alio autore quaesita inueniebant.<sup>6</sup>

法学において、哲学において、古代人は何と多くの働きをしたことか。それら全ては何のためにあったのか？我々が現れて彼らを侮蔑するためなのか。あるいはむしろ最高の宗教が最も素晴らしい学問によって讃えられ、支えられるためではないのか。異教世界において勇気をもって為され、見事に語られ、独創的に考えられ、まじめに伝えられてきたものは全て、キリストによって彼自身の社会のために用意されてきたものなのである。彼こそが知性を与え、彼こそが探求の情熱を加え、他の何ものにもよらず、彼らは探求したものを獲得したのである。

<sup>4</sup> Allen IV, pp. 278-80.

<sup>5</sup> Van Leijenhorst, C. G., 'A note on the date of the *Antibarbari*', *Erasmus in English* 11, 1981-2, p. 7.

<sup>6</sup> *Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami* I-1, ed. K. Kumaniecki (North-Holland Publishing Company, 1969) p. 83, ll. 14-19. 以下ASDI-1, p. 83, ll. 14-19. のように略記する。

以上のような主張をエラスムスは対話の中で親友のバットに語らせる形をとっている。さらにそのバットの回想の中で、バットとその友人が異教文学について議論を戦わせる設定が用意されている。その回想の中でバットとその友人はともに図書館に赴く。そこでバットがキケロの著作に興味を示すとその友人はグラティアヌスの『教令集』を持ち出し、その中の異教文学に対して否定的な文章を読み上げていく。そこでバットはその友人に対して、今度は自分が頼る神学者にこの問題について尋ねてみようと言ってヒエロニムスを持ち出すのである。エラスムスが異教文学の擁護のために引用しているのは、ヒエロニムスがローマの弁論家マグヌスに宛てた書簡70と後にナポリ近くのノラで司教となるパウリヌスに宛てた書簡53である。ここではマグヌス宛の書簡からの引用箇所を見ておこう。

*Quod autem quaeris in calce epistolae tuae, cur in opusculis nostris secularium literarum interdum ponamus exempla et candorem ecclesiae ethnicorum sordibus polluamus, breuiter responsum habeto : nunquam hoc quaereres, nisi te totum Tullius possideret, si scripturas sanctas legeres, si interpretes earum omisso Vulcatio euolueres. Quis enim nesciat et in Mose et in prophetarum voluminibus quaedam assumpta de gentilium libris et Solomonem philosophis Tyri et proposuisse nonnulla, et aliqua respondisse. Vnde in exordio Prouerbiorum commonet, vt intelligamus sermones prudentiae versutiasque verborum, parabolae et obscurum sermonem, dicta sapientium et aenigmata, quae proprie dialecticorum et philosophorum sunt. Pauloque inferius Paulum collaudans, Ac ne parum hoc esset, inquit, ductor Christiani exercitus et orator inuictus, pro Christo causam agens, inscriptionem fortuitam arte torquet in argumentum fidei. Didicerat enim a vero Dauid de manibus hostium extorquere gladium et Goliae superbissimum caput proprio mucrone truncare. Legerat in Deuteronomio domini voce praeceptum mulieris captivae radendum caput supercilia omnes pilos et ungues corporis amputandos et sic eam habendam coniugio. Deinde post ea verba, quae paulo superius recitauimus, Osee, inquit, accepit uxorem fornicariam Gomer filiam Debelaim id est dulcedinum et nascitur ei de meretrice filius Israel qui vocatur semen dei. Esaias nouacula acuta barbam et crura radit peccantium. Et Ezechiel in typo fornicantis Hierusalem tondet caesariem suam et quicquid in ea absque sensu et vita est, auferatur.<sup>7</sup>*

「あなたは手紙の最後で問いかけています。なぜわれわれの作品の中にとときどき世俗文学から模範を引き、また教会の輝きを異教のよごれで汚すのでしょうか、と。手短かに答えましょう。もしあなたがキケロにまったく捕らえられてしまうことなく聖書を読み、ウルカティウス<sup>8</sup>は別として、その解釈者たちを紐解いているなら、このことを問うことはありません。モーセにおいても他の預言書においても異教徒の書物から取り入れられたものがあること、またソロモンがテュロスの哲学者たちにいくつか討論を持ちかけ、また答えもしたことを誰が知らないで

<sup>7</sup> ASD I-1, p. 111, l. 30-p. 112, l. 16. ヒエロニムス書簡70. 2. 1/4/6 CSEL 54. 700. 13 / 702. 1-9/16.

<sup>8</sup> キケロの注釈者。

しょう。ですから『箴言』のはじめで彼が、分別ある話、言葉の微妙さ、たとえ話、不明瞭な話、知恵ある人の言葉、謎などを理解するように勧めているのです。それらは本来は弁証家や哲学者のすることです」。それから少し先にパウロを讃えて、「これで足りないとあれば、キリスト教の軍隊の指導者、キリストのために戦う、敗れることのない弁証家はたまたま見いだされた碑文をしっかりと信仰の議論に用いています（使徒言行録 17:23）。彼は真のダヴィデに、敵の手から剣を奪いとりゴリアトの驕り高ぶった頭を彼自身の刃で切り取ることを学んだのでした（サムエル記上 17:51）。彼は申命記に神の声の命令、すなわち捕虜の女性は頭と眉を剃り、体のすべての毛と爪を切り取り、そして妻とすることを読みました（21:10-13）。」先ほどわれわれが見た箇所ของすぐ後に、「ホセアは、ディブライムの娘で淫行の女ゴメル、すなわち甘美、を妻として迎えました。その売春婦から彼に息子イズレエルが生まれ、神の種と呼ばれています（ホセア書 1:2-4）。イザヤは鋭い剃刀で罪の髭と脛を剃りました（イザヤ書 7:20）。そしてエゼキエルはエルサレムの姦姪のしるしとして自分の髪を切り落とし、彼女の中の感覚と命のないものは何もかも取り除かれました（エゼキエル書 5:1）。

このヒエロニムスからの引用の要点は、旧約聖書に説かれる、淫行の女をめとるように神が命じたこと（ホセア書 1:2-4）、戦争で捕らわれの身となった女性を異教の「汚れ」を取り除くことによって妻とすることが許されていたこと（申命記 21:10-14）などを根拠に異教の文学を擁護している点にある。エラスムスは、この点についてキリスト教信仰と一致しないような見解 *opinio* は取り除き、知識 *scientia* や技術 *ars* としての自由学芸を役立つものとして受け入れることであると言いつつ換えている<sup>9</sup>。

## 2. 修道院時代のコルネリス・ヘラルトとの交流から

ペストによって両親を亡くしていたエラスムスは 1487 年ころ、後見人たちの圧力に屈して心ならずも修道院に入ることになる。その修道院はハウダ近くのステイン Steyn にあるアウグスチノ修道祭式者会 *Ordo Canonicorum Regularium Sancti Augustini* のものであった。エラスムスはステインを選んだ理由の一つとして、そこにデフェンテルの学校で共に学んだ友人がいて古典文学と一緒に学ぶ機会があることを知らされていたと『自伝』の中で述べている<sup>10</sup>。エラスムスは修道院入りする以前にも訪れており、蔵書なども自分で見て知っていたようだ。またステインの修道院にはエラスムスの父が残した写本が保管されていたという推測もなされている<sup>11</sup>。

エラスムスが残したもののなかで最も古いものが、この修道院に入ったところに書かれた

<sup>9</sup> ASD I-1, p. 112, ll. 18-23.

<sup>10</sup> Allen I, p. 50. *Compendium vitae*.

<sup>11</sup> Allen I, p. 74, note 2.

とされる詩や書簡である。それらからは、エラスムスが友人と詩作や文学の楽しみを分かち合う様子がうかがえる。その文通相手のなかで最も重要な人物がコルネリス・ヘラルト Cornelis Gerard (c. 1460-c. 1531) である。なぜなら、ヒエロニムスの考え方をエラスムスに説いて異教文学をキリスト教信仰のために用いるように勧めているからである。

コルネリスはハウダに生まれ、デフェンテル、ケルン、ルーヴァンに学び、パリで学士、修士の学位を得ている。おそらく 1486 年に修道士となり、1488 年までにはライデン近郊のロプセン Lopsen のアウグスチノ修道祭式者会の一員となっていた。1497 年には聖ヴィクトル修道院の刷新を支援するためにパリに派遣され、1508 年には皇帝マクシミリアンから桂冠詩人の称号を与えられている<sup>12</sup>。修道士としてもすぐれ、そして文学的素養も豊かな人物だったといえるだろう。コルネリスはエラスムスの文学熱を理解できる相手だった。

おそらく 1489 年ころエラスムスはコルネリスの詩人としての評判を知り、手紙や自作の詩を送っている。コルネリスはエラスムスから送られてきた詩に加筆して応答形式の詩「野蛮人に対するヘラスムスとコルネリスの弁明」*Apologia Herasmi et Cornerii aduersus barbaros* に仕上げた。コルネリスの書簡に見られるその詩作についての記述を見てみよう。

Caeterum vt et haec tibi plenius innotescant quanti penes me tuum mihi constet ingenium, operam dedi et carmen tuum debita recommendatione celebrandum nostra licet rudi confabulatione subdiuidens, Dialogum Apologeticum feci, prout titulus huic tuo et nostro communi libello praefixus facile manifestat. Nec hoc tibi, quaeso, indignationem faciat, me tuos versus paucissimis interdum verbis commutasse et ad aliud metri genus in finem retorsisse : sed plurima velim ratione et suaui quadam nostrae charitatis praesumptione id factum esse non ambigas.<sup>13</sup>

さらに、私があなたの才能にどれほどの価値を置いているかがよりよく知られるように、しかるべき推奨によって讃えられるべきあなたの詩を、荒削りではありますが、私たちの会話として分け、対話による弁明を作りました。その小品に付された題名は、あなたと私がここで何を共有しているかがはっきりと分かるようになっています。あなたを怒らせる事がないように願います。というもの、私はあなたの詩句をとところどころ最小限の言葉において変更し、最後には別の韻律のものに変えてしまったからです。でもそれは深い配慮と私たちの愛情への甘い期待といったものによってなされたことをあなたにはっきりと知ってもらいたいです。

エラスムスを送った詩をコルネリス自ら加筆することによって「野蛮人に対する弁明」へと作りかえ、最後は韻律を変えたものにしたということが読み取れる。コルネリスは題名に二人の共有するものを込めたという。コルネリスはエラスムスから受け取った詩を四つに分けて、それぞれ

<sup>12</sup> Bietenholz, Peter G., ed., *Contemporaries of Erasmus*, vol. 2 (Univ. of Toronto Press, 1986) pp. 88-89.

<sup>13</sup> Allen I, p. 96, ll. 16-24.

れの後に自分の詩を加えて完成させたようだが、最後に加筆した詩句、つまり「最後には別の韻律のものに変えてしまった」と言及していると思われる詩句は出版される過程においては別の道歩んだ経緯がある。その詳細にはここで立ち入らないが<sup>14</sup>、ヴレデヴェルトの編集による新しい全集版ではエラスムスの最後の詩句までを CARMINA 93<sup>15</sup> とし、最後のコルネリスの詩句は別のもの CARMINA 135<sup>16</sup> として収められている。

その二人の合作の CARMINA 93「野蛮人に対する弁明」のうち、エラスムス作とされる詩句では、「嫉妬」によって詩を書くことをやめるように強いられていると歌われている。あまりの異教文学への傾倒ぶりに他の修道士たちから白眼視されたり、あるいは非難を受けたりして孤独感を強めているエラスムスの姿が想像される。そんな中でコルネリスの評判を聞き、助けを求めるような気持ちで詩を書き送ったのではないだろうか。さらにエラスムスによる詩句には、古代の異教の詩人たちの名が挙げられ、そしてギリシア神話のオルフェウスの逸話に寄せて自分のいる場所で詩がないがしろにされていることを嘆いている。そうして詩を書くことをやめていたが、コルネリスを第二のヘラクレスと讃え、その出現によって再び自分の中のムーサイが動き出したと歌っている。ヴレデヴェルトによれば<sup>17</sup>、この下地にはクラウディアヌスの『プロセルピアの略奪』*De raptu Proserpinae* があり、その第二巻の序文でクラウディアヌスは長い間創作意欲がわかなかったが、歌うことをやめていたオルフェウスがヘラクレスの偉業に触れて再び堅琴をとったように、支援者のフローレンティウスの登場によって創作を始めたと言っているという。エラスムスは、コルネリスの存在が文学を愛する自分にとって救いとなっていることを伝えようとしたのだろう。

このようなエラスムスの詩に対してコルネリスはどのように応えたのか。ヴレデヴェルトにも指摘されているが<sup>18</sup>、コルネリスが後から加えたと思われる詩句には、ウェヌスやユピテルなどローマ神話の神々、そしてホメロスへの言及はあるものの、キリスト教世界への言及が多い。ヒエロニムスやレオ一世も登場し、またルカやパウロなど新約にかかわる人物も登場するが、旧約で説かれる事跡が多い。もともとのエラスムスの詩句には異教古代への言及しか見られないのと対照的である。つまりコルネリスはエラスムスの詩を受けて「詩への妬み」とは、周囲からの「異教の」詩に対する眼差しであることを理解して、キリスト教の中での詩の存在を歌い上げることによってエラスムスを励まそうとしたとみられる。さらに CARMINA 93「野蛮人に対する弁明」には次のように歌われている個所がある。

<sup>14</sup> 詳細は ASD I-7 edited by Harry Vredeveld (Elsevier Science Publishers b.v. 1995) pp. 45-60.

<sup>15</sup> ASD I-7, pp. 268-282.

<sup>16</sup> ASD I-7, pp. 447-449.

<sup>17</sup> *Collected Works of Erasmus* vol. 86 translated by C. H. Miller, edited and annotated by H. Vredeveld (Univ. of Toronto Press 1993) p. 572. 以下 CWE 86, p. 572 のように略記する。

<sup>18</sup> ASD I-7, pp. 16, 269.



Buccis parce tuis! Hactenus, inuide,	妬む者よ、戦慄く口を閉じよ、これまで
Nil sacris dedimus carminis edibus,	我々は神聖なる寺院に歌を捧げてこなかった。
Sed iam sceptra michi Dauidis in vicem	しかし今、ダヴィデのようにメルコムからの
Melchom de spoliis feram.	略奪品から王笏を掲げよう。
Gomer Debelaym coniugio fruar,	私はデベレイムの娘ゴメルとの婚姻を享受し
De scorto generans Israhel inclitum,	娼婦から栄光あるイスラエルを生み出す。
Quo semen domini pulchrius emicet	そうして主の種はより美しく、ムーサイの
Dulci Lybetridem sinu. <sup>19</sup>	心地よい懷から輝きを放つ。

このダヴィデが異教の民族から戦利品を奪ったこと（サムエル記下 12：30）とホセアが娼婦ゴメルを妻に迎えたこと（ホセア書 1：2-4）は、異教のものをキリスト教のために用いることを意味している。これはヒエロニムスに由来しており、特にゴメルの話はヒエロニムスのマグヌス宛書簡に、異教の文学を学ぶことの根拠として引かれており、エラスムスも『反蛮族論』で引用していることは第一節でみたとおりである。

次にコルネリスが加筆した最後の部分、韻律を変えたとされる詩句 CARMINA 135「野蛮人に対する弁明：エピローグ」を見ていこう。ヒエロニムスは語るといって始まるこの詩は詩作を大いに讃えているが、次のような箇所<sup>20</sup>が見られる。

Sed quaedam vicia tibi dico iure cauenda.	しかしある種の過ちに警戒せよと言おう。
Prospice ne maculet damnanda superbia mentem,	忌むべき傲りによって心を汚さないように。
Neue pios spernas qui nondum carmina norunt,	詩を知らない敬虔な人を軽んじないように。
Attamen haud vates temnunt, sed amant venerantes.	彼らは詩人を蔑むよりむしろ敬愛している。
Si stilus ipse placet, placet et sententia vernans,	筆致も好ましく、内容も快活であれば
In quibus Aoniae renitent ( me iudice ) Musae,	その中にはアオニアのムーサイが輝く
Non reprobo studium, veniam concedo legenti.	その探求も拒まないし読むことも認めよう。

Dum tamen ex aequo scripturas pondere sacras	そして同じだけ、いやそれ以上に聖書を
Pensans, imo magis venerans, te dedis amori	崇拜しながら、ピエリアに愛を捧げ
Pierio, quo vel nitidum tuus induat alto	あなたの言葉に高貴な表現と輝く筆致を
Scemate sermo stilum, aut Aegypti fulgida tollens	まとわせ、きらめくエジプトの器を用いて
Vasa, pares domino pulchrum aedificare sacellum,	主のために美しい聖堂を築こうとするなら
Non culpandus eris, sed laudem laude mereris.	あなたは非難ではなく賞賛に値するだろう。

<sup>19</sup> ASD I-7, pp. 280-81, ll. 173-79.

<sup>20</sup> ASD I-7, pp. 448-449, ll. 9-14; 15-20; 29-35.

Si quae gesta legis veterum ratione soluta,	あなたが散文で古代人の偉業を読み
Haec vis in numeris pedibusque ligare disertis,	それらに巧みな脚韻を施そうとするなら
Ingenium veneror et dulci carmine laetor.	あなたの才能を敬い、心地よい歌を楽しもう。
Historias imitare sacras quum scribere tentas;	書くときには聖書の歴史に倣いなさい。
Ornet Musa stilum, scriptura paret tibi sensum.	ムーサが文体を与え、聖書が意義を授けるだろう。
Cornelius concludit assentiens:	コルネリウスが賛同しつつ締めくくる
Ieronimi dictis assentio, dulcis Erasme:	愛するエラスムスよ、ヒエロニムスに私は賛同する。
Sic faciamus in his quae nutrit amaena poesis.	彼の言うように詩作の喜びを育んでいこう。

コルネリスはここでヒエロニムスの口を借りてではあるが、より直接的にエラスムスに忠告を与えているように見える。つまりどんなに古代の詩を読もうとも「詩を知らない敬虔な人を軽んじないように」、そしてどんなに異教の詩人たちに憧れても「それ以上に聖書を崇拜」せよと。そしてさらに重要と思われるのが「きらめくエジプトの器を用いて主のために聖堂を築こうとするならあなたは非難ではなく賞賛に値します」との勧めだろう。つまりキリスト教の題材を詩にせよということである。「ムーサイが文体を与え、聖書が意義を授ける」とも言っている。「エジプトの器」とは旧約聖書でイスラエルの民がエジプトを出るとき、金銀や装身具を奪ったこと（出エジプト記 3: 21-22）を指す。このことを異教の学問をキリスト教信仰に役立てることの根拠とすることはアウグスティヌスの『キリスト教の教え』第二巻 40 章に見られる<sup>21</sup>。

エラスムスは以上のコルネリスの詩に対してどのように答えたか、エラスムスがコルネリスに宛てた書簡を見てみよう。

Atque sicut iucundissimo tuae erga me beneuolentiae argumento ex meis tuisque versibus vnum compegisti Apologeticum, ita duos (si tamen id fieri potest vt quidquam inter amicos diuisum reperiamus ) duorum animos vnum amoris mutui vinculum connectat ; vt, sicut tui meo carmini et tuis mei intexti sint versibus, ita et tuus in me et meus in te semper habitet animus :<sup>22</sup>

あなたの私に対する好意のきわめて心地よい証拠として、あなたと私の詩句を一つの弁明へと組み立ててくれました。たとえ友の間にも隔たりのある何かを見つけるようなことになっても、あなたの詩句が私の詩を自らの詩句の中に編みこんでくれたように、二人の二つの心はお互いの愛という一つの絆で結ばれるでしょう。そうしてあなたの心は私の中に、私の心はあなたの中にいつも保たれることでしょう。

<sup>21</sup> 『アウグスティヌス著作集第六巻』加藤武訳( 教文館, 1988 年) pp. 140-42.

<sup>22</sup> Allen I, p. 98, ll. 65-70, Ep. 20.



友情が強調されているけれども、つまりエラスムスは二人の間に「隔たり」があると言っている。そして宗教詩へといざなうコルネリスに対して自分の愛する作家たちを列挙する。詩の模範としてウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウスらを、そして散文の模範としてはキケロ、クインティリアヌス、サルスティウス、テレンティウス、さらにロレンツォ・ヴァッラの名を挙げている。そして *Quidquid ab his, fatebor enim, literis non mandatum est, ego in medium proferre non ausim. Tu si quos alios admiseris, id ego vituperio minime dederō.*<sup>23</sup>「以上の作家たちによって用いられない言葉遣いはどんなものでも公にするものに用いるつもりはありません。あなたが他の人たちを加えていても非難したりしません」とまで述べている。ここでコルネリスに気を遣って言っている「他の人たち」とは宗教的な題材を扱う作家をさすと考えるのが自然だろう<sup>24</sup>。コルネリスが先の詩の中で示した忠告に対してははっきりと自分の文学の好みを述べている。つまりエラスムスは、キリスト教的主題を取りあげるよりも、異教の詩人たちを模範にするといっているのである。

このときエラスムスは、ヒエロニムスについてはどう思っていたのか。実は本稿の冒頭に紹介した、友情は意見の対立を排除しない例として挙げられたアウグスティヌスとヒエロニムスについての言及は、この書簡 Ep. 20 のコルネリスとは考え方に隔たりがあると述べている個所と古代の詩人たちを列挙している個所の間になされているものなのである。つまりヒエロニムスの口を借りたコルネリスの勧めに対して、エラスムスはヒエロニムスとアウグスティヌスのあいだにも意見の相違があったことを引き合いにして、その勧めとは違う自分の行き方を示していたのである。このような文脈でとらえなおしてみると冒頭で紹介した文も、エラスムスのヒエロニムスに対する敬意と傾倒を単純に示すものではないように見えてくるのではないだろうか。

第一節でみたようにエラスムスは1495年の『反蛮族論』の中で、コルネリスが合作詩「野蛮人に対する弁明」で示したようなヒエロニムスの考え方を自らの異教文学擁護論の支えの一つとして組み込むことになるが、いま見たようなコルネリスの勧めに対するエラスムスの1489年頃の応答は、ヒエロニムスへの態度とともに注目しておくに値すると思われる。

### 3. グラティアヌスを通してのヒエロニムスの引用

ヒエロニムスからの引用はどのようになされているかを教えてくれるのは、グラティアヌスである。なぜならグラティアヌスも異教の文学の取り扱いについて論じる命題において、どの教父よりもヒエロニムスから引用しており、しかもグラティアヌスは肯定・否定の両方の立場を等しく紹介しているからである。グラティアヌスの『教令集』は1141年に、聖書、教父、教

<sup>23</sup> Allen I, p. 99, ll. 96-106.

<sup>24</sup> Heesakkers, Chris L., 'Erasmian Reactions to Italian Humanism', *Erasmus of Rotterdam Society Yearbook* 23, 2003, p. 30.

皇、教会議から引き出された教会法規をもとにボローニャの修道士グラティアヌスによって作られ、原題を『教会法矛盾条令義解類集』あるいは『矛盾する教会法令の調和』 *Concordia discordantium canonum* といい、成立後 700 年にわたって教会法の教科書として用いられた。101 の法律命題からなる第 1 部、36 の事例からなる第 2 部、秘蹟を扱った五項目からなる第 3 部の 3 部構成で、この『反蛮族論』で引用されるのは聖職者の教育の問題を扱った命題 36, 37, 38 のうち異教の文学・学問を論じた命題 37 である。グラティアヌスは命題 37 のはじめに、聖職者は異教の文学によって教育されるべきであったか、との問いを掲げて、まず前半において異教の学問に対して否定的な見解を紹介していき、後半に肯定的な見解を紹介して議論を進めている。

先に紹介したように、『反蛮族論』においては、バットの友人が『教令集』から異教の文学に否定的な文章を断片的に読み上げていくのに対抗して、バットはヒエロニムスの書簡からの引用を通して反駁していくのであるが、その友人が読み上げる四つの文章のうち、*Nonne <uobis> videtur in vanitate sensus et obscuritate mentis ingredi, qui diebus ac noctibus in dialectica arte torquetur, qui physicus perscrutator oculos trans coelum leuat...*<sup>25</sup> 「日も夜も弁証の方法に苦心する者や天のかなたまで目を向ける自然学の観察者は感覚の空しさや心の闇のために働いているのではないか」と *Sicera inebriantur, qui abutuntur, scientia seculari et dialecticorum tendiculis.*<sup>26</sup> 「世俗の知識 { 知恵 } と弁証家たちの罍を乱用する人たちは強い酒に酔っている」の二つはヒエロニムスのものなのである。さらにグラティアヌスの『教令集』では、これらの前にヒエロニムスが教皇ダマスに宛てた書簡 21 からの引用がみられる。

Sacerdotes Dei omissis euangeliiis et propheciis uidemus comedias legere, amatoria bucolicorum uersuum uerba cantare, tenere Virgilium, et id, quod in pueris est causa necessitatis, crimen in se facere uoluntatis.<sup>27</sup>

神の祭司たちでさえ、福音書や預言者をなおざりにしながら、喜劇を読んだり、田園詩の中から恋愛の言葉を口ずさんだり、ウェルギリウスに愛着を覚えて、少年の頃はやむなく犯していた罪を今度は自ら進んで犯したりするのを私たちは見ます。

そしてグラティアヌス是否定的見解の結論にいたる第 7 節の冒頭に *Ieronimus ab angelo uerberatur, quia Ciceronis libros legebat*<sup>28</sup> 「ヒエロニムスはキケロの書物を読んだために天使に

<sup>25</sup> ASD I-1, p. 108, ll. 26-28; Decretum Gratiani 1, Dist. 37, c. 3, *Corpus Iuris Canonici*, ed., A. L. Richter and A. Friedberg (Leipzig, 1879; repr. 1922)I, p. 135. 以下CIC p. 135 と略記する。

<sup>26</sup> ASD I-1, p. 108, ll. 28-29; Decretum Gratiani 1, Dist. 37, c. 4, CIC p. 136; Migne, ed., *Patrologia Latina*, 24: 328 c. , ASD ではscientia seculari, CIC ではseculari sapientia .

<sup>27</sup> Decretum Gratiani 1, Dist. 37, c. 2. CIC, p. 135. 「書簡21」荒井洋一訳『中世思想原典集成4 ラテン教父』(平凡社1999年)p. 656. 翻訳に一部変更を加えた。

<sup>28</sup> Decretum Gratiani 1, Dist. 37, c. 7. CIC, p. 137.

鞭打たれた」との題目を記している。これは有名な「ヒエロニムスの夢」とよばれるもので、エルサレムへと向かったときも異教の文学を手放さず愛読し、その途上、病に倒れたときに見た夢である。グラティアヌスは直接引用していないが、書簡 22 の中で生き生きと描かれている<sup>29</sup>。その夢の中でヒエロニムスは、おまえはキケロの徒ではあるがキリスト教徒ではないと責められて鞭打ちの刑に処され、二度と異教徒の書は読まないと誓ってようやく許されたという。このようにグラティアヌスは異教文学を読むことを否定する立場の議論を、ヒエロニムスからの引用または彼への言及をいくつも用いながら進めているのである。

『教令集』の中では異教文学を学ぶことを肯定する立場の議論の中にもいくつかのヒエロニムスの文章が見られるが、そのうち一つだけ見ておかなければならないものがある。それは *Si quis artem nouerit grammaticam vel dialecticam, ut recte loquendi rationem habeat et inter falsa et vera diiudicet, non improbamus.*<sup>30</sup> 「もし文法や弁証法の学問を知ったものが、正しい話し方を身につけ真と偽の区別ができるようになるなら我々はそれらを否定しない」である。これをエラスムスは『反蛮族論』の中でアンブロシウスのものとして引用している。

以上のようにグラティアヌスは異教文学の取り扱いをめぐる命題 37 において肯定・否定両方の立場に、ヒエロニムスからの引用または彼への言及を多用している。そして否定の立場の背景にはヒエロニムスによる異教文学にたいする強烈な非難がある。しかし『反蛮族論』においてエラスムスはそのことを示していない。しかもグラティアヌスが異教の学芸を容認する立場の文章をヒエロニムスから引用していることまでも示していないことから、グラティアヌスがヒエロニムスにも依拠していることを隠そうという意図が感じられる。ヒエロニムスからの引用である文章をアンブロシウスのものとしていることについてテキストを校訂したクマニエキは注で「エラスムスのこの間違いは命題 37 第 8 節でヒエロニムスの直前にアンブロシウスが引かれている事実から説明されうる<sup>31</sup>」としているが、単なる誤りではなく以上のような意図が働いた結果という可能性も否定できないだろう。

グラティアヌスの教令集をもとにヒエロニムスの書簡を引用して異教の文学を擁護するやり方は、ボッカッチョの『異教の神々の系譜』(1371 年)以来イタリアのヒューマニストたちのあいだに見られるという<sup>32</sup>。『反蛮族論』が書かれ始めた頃と同時期(1489 年頃)のエラスムスの書簡<sup>33</sup>にはヴァッラをはじめ多くのイタリアのヒューマニストの名が挙げられ、彼らの文学への献身ぶ

<sup>29</sup> 荒井洋一訳「書簡22」『中世思想原典集成4 ラテン教父』(平凡社1999年)pp. 707-8.

<sup>30</sup> ASD I-1, p. 109, ll. 22-24. *Decretum Gratiani* 1, Dist. 37, c. 10. CIC p. 138. Hieronymus *In Tit.* 1 ed., Migne, *Patrologia Latina*, 26; 593.

<sup>31</sup> ASD I-1, p. 109, footnote to ll. 22-24.

<sup>32</sup> Rutherford, David, 'Gratian's *Decretum* as a source of patristic knowledge in the Italian Renaissance: The example of Timoteo Maffei's *In Sanctam Rusticitatem* (1454)' in *The Reception of the Church Fathers in the West: From the Carolingians to the Maurists*, ed., Irena Backus (E. J. Brill 1997) vol. 2, p. 525.

<sup>33</sup> Allen I, p. 107. Ep. 23.

りが讃えられている。エラスムスが彼らの影響を強く受けていたことは間違いない。

#### 4. ヒエロニムスの引用のあり方 —— dissimulatio

グラティアヌスを通してのヒエロニムスの引用の仕方、つまりグラティアヌスに見られるヒエロニムスの異教文学に対する否定的見解をヒエロニムスのものと示さず、また肯定的見解さえも、グラティアヌスもヒエロニムスに依拠していることを伏せようとするかのようにアンブロシウスのものとして引用していたことをどのようにとらえるべきか。

グラフトンとジャーディンは、エラスムスがいくつもの書簡の中で自らの世俗領域の著作や出版活動が、あたかも聖書や教父の著作に関する仕事と深い結びつきがあるように言及している事実は、異教文学をキリスト教の敬虔に溶接しようとするためには「巧妙な知的ごまかし」 intellectual sleight-of-hand が必要であることを示していると述べている<sup>34</sup>。トレイシーは、グラフトンとジャーディンがエラスムスにおける異教文学とキリスト教信仰の関係について「知的ごまかし」という言葉を使ったことに対して、dissimulatio（ふりをする、韜晦）を持ち出している。トレイシーは、この dissimulatio は自分の意図するところを最も優秀な読者にしか分からないような書き方をする著者の特権といったもので、エラスムスはこの根拠を聖書の中に見出しており、エラスムスの中に一貫性を見出すことのむずかしさを倍増させているものだとしている<sup>35</sup>。これは、「ガラテヤの信徒への手紙」(2:11-14)において、ペテロが普段の姿勢を変えてユダヤ人キリスト教徒に従ったことをパウロが叱責しているのは、異邦人キリスト教徒がユダヤ人の食事の決まりに従う必要はないことを示すためにペテロとパウロが示し合わせて行ったものだという解釈から生まれ、ヒエロニムスはこのように解釈し、一方、アウグスティヌスはペテロの態度の変更は偽りそのものであり、パウロの叱責は本物だと解釈しているという。トレイシーによれば、エラスムスはヒエロニムスに従い、さらに、福音書に描かれるイエスがその神性を隠し、飢えに苦しみ、涙を流し、怒りに震えている姿にも dissimulatio が許される根拠を見ているという。このような dissimulatio という視点を参考にしながら、もう一度、『反蛮族論』でのヒエロニムスの引用のあり方について考察してみたい。

ここで注目するのは、図書館の中で、エラスムスの代弁者であるバットに対してグラティアヌスを持ち出してきた友人の描かれ方である。このバットの友人は、人の妻を寝取ることを武勇伝として語りながら、異教の文学を読むことは不敬虔なことだと言い張るような人物である<sup>36</sup>。そ

<sup>34</sup> Grafton, Anthony and Lisa Jardine, *From Humanism to the Humanities: Education and the Liberal Arts in Fifteenth- and Sixteenth Century Europe* (Harvard University Press, 1986) p. 144.

<sup>35</sup> Tracy, James D., 'Erasmus among the Postmodernists: Dissimulatio, Bonae Literae, and Docta Pietas Revisited' in *Erasmus' Vision of the Church*, ed., Hilmar M. Pabel (Sixteenth Century Journal Publishers, 1995) p. 10.

<sup>36</sup> ASD I-1, pp. 107-108.

して彼は、バットに対してグラティアヌスの『教令集』をところどころ読み上げるだけであり、バットは、その読み方の偏りを指摘する。...nondum satis pernosti Gratianicam eloquentiam, de unaquaque re non in utramvis, sed in utranque partem disputat, et quidem pari copia parique facundia...「君はグラティアヌスの論じ方をまだ十分に知らない。彼は一つ一つの事柄について片方だけでなく両方の立場を質・量ともに等しく論じている<sup>37</sup>」。そしてバットが、グラティアヌスに続いてヒエロニムスの書簡を読みあげても、Cum ille nihil intelligeret<sup>38</sup>「彼は何も理解できていなかったのだ」とあるように、つまり彼は、正確に読むことも、人に読んでもらって理解することもできない人物として描かれているのである。そのように読めない理由をバットは次のように指摘している。

Nec miror, inquam, si non capis venatu, quae minime venaris; quae pro te faciunt, ea demum excerpis; quae pro tua causa facere videntur, legis nec perlegis nec intelligis ea, quae legis; quod non ita eueniret, nisi tam in fugiendis literis ethnicorum esses religiosus<sup>39</sup>.

あなたが本当に獲得しようとしていないものを捕えることができなくてもわたしは驚かない。あなたは自分に都合のよいところだけを選んでいたので。自分の目的にかなうところだけを読んでいたので、あなたは読んでいるものをちゃんと読むことも理解することもできない。あなたがそれほど異教文学を避けることに熱心でなければ、そのようなことは起こらなかったでしょう。

このような読み方の指摘は、もしヒエロニムスの引用のあり方が、上に述べたような偏りのあるものならば、たいへん有効な演出というべきだろう。グラティアヌスをめぐるバットと友人の対話は、読める人間と読めない人間の間に起きているのである。著者エラスムスは、文学を敵視している人物の読みの偏りを揶揄しているのであるが、自分の引用の偏ったあり方については棚に上げているというより、もしトレイシーのいう *dissimulatio* を駆使しているのなら、逆に分かる人間にだけ自分のやり方を告白しているようにも読める。グラティアヌスとヒエロニムスの両方を読んでいる人間にはごまかしはきかないのだから、どちらかというならやはりこれは *intellectual sleight-of-hand* ではなく、*dissimulatio* であろう。エラスムスはこの読み方の指摘のすぐ後にバットに次のように言わせている。Nulla autem ex liberalibus disciplinis Christiana est, quia neque de Christo agunt, neque a Christianis inuentae, ad Christum autem omnes referuntur.「そもそも自由学芸とはどれもキリスト教のものではない。キリストを論じてもないし、キリスト教徒によって見出されたわけでもない。しかし、それらはすべてキリストに関係あるので

<sup>37</sup> ASD I-1, p. 109, ll. 13-15.

<sup>38</sup> ASD I-1, p. 112, l. 17.

<sup>39</sup> ASD I-1, p. 110, ll. 9-12.



す<sup>40</sup>」。フィリップスは、この言葉を異教の学問はキリスト自身が自分のために用意したとの趣旨の言葉と並んで、エラスムスが『反蛮族論』で最も言いたかったことであり、その後のエラスムスの著作すべてを支える考え方を表すものであると述べている<sup>41</sup>。

このような引用のあり方から分かることは、エラスムスは異教文学についてヒエロニムスに教えを乞うというより、異教文学の擁護のためにヒエロニムスの権威をかりているということだろう。ボイルは『反蛮族論』においてエラスムスがアウグスティヌスを引用しているかどうかではなく、どのように引用しているかが重要であると指摘している<sup>42</sup>。アウグスティヌスのように権威が確立していた教父は、彼の異教文学への態度の二面性もあって、異教文学に反対する側でも引用されるものだからである。ボイルはエラスムスがアウグスティヌスを引用しながら独自の考えを展開する様子を描こうとしている<sup>43</sup>。このようなエラスムスの姿勢はヒエロニムスに対しても同様であることが、上の引用のあり方から見てとることができるのではないと思われる。

## 結びにかえて

1516年、ヒエロニムスの著作集を出版した年に、エラスムスは自らのラテン語訳を付したギリシア語の新約聖書を出版している。エラスムスにとってヒエロニムスは聖書研究の導き手であった。またエラスムスは生涯、教父の著作の編集出版に携わり、死の二ヵ月後1536年9月には最後のオリゲネスの著作集が世に出された。エラスムスにとって教父たちが生涯にわたって重要な存在であったことは疑いない。教父の伝統を復活させ受け継いだということができよう。しかし、ただ教父たちのやり方を踏襲したという見方では<sup>44</sup>、エラスムスの独自性をつかんでいくことは難しくなるだろう。本稿で見たヒエロニムスの扱い方には独特の距離感のようなものがあると思われる。本稿で扱ったのはエラスムスが若いころに書いたものではある。しかし『反蛮族論』は、1520年、新約聖書をギリシア語の文法の知識を駆使して読み解こうとする、いわゆるヒューマニストの方法をめぐって、エラスムスがルーヴアン大学の神学者たちと激しく対立していた最中に出版された。論争の相手である神学者たちに向けて出版されたことは、その際の加筆に明らかである<sup>45</sup>。エラスムスはその序文の中で若いころから抱いていた異教文学への変わらぬ想いを

<sup>40</sup> ASD I-1, p. 110, ll. 14-16.

<sup>41</sup> Phillips, M. M., Introductory Note, CWE 23, pp. 9-10.

<sup>42</sup> Boyle, Marjorie O'Rourke, *Christening Pagan Mysteries: Erasmus in Pursuit of Wisdom* (Univ. of Toronto, 1981) p. 6.

<sup>43</sup> *Ibid.*, pp. 4-8.

<sup>44</sup> 畑宏枝「エラスムスにおける『反野蛮人論』とヒューマニズム」『基督教学研究17』京都大学基督教学会(1997年)p. 70. 木ノ協悦郎『エラスムスの思想的境地』関西学院大学出版会(2004年)p. 60.

<sup>45</sup> Phillips, M. M., Introductory Note, CWE 23, pp. 10-15.



吐露している<sup>46</sup>。異教文学を擁護する個所もヒエロニムスの引用についても1520年の段階での変化はほとんどない。本稿で紹介した文章は1495年のそのままの姿で出版された。『反蛮族論』で示されているエラスムスの異教文化への眼差しには、教父たちの伝統の枠を越えている側面があるように感じられる。そのような姿勢をエラスムスは晩年まで持ち続けたのではないか。今後は、この点についてイタリアのヒューマニストたちの影響も考慮しつつ、先に述べた教父たちとの距離感を読み解きながら探求していきたい。

---

<sup>46</sup> Allen IV, p. 278.